

[研究論文]

文学の技法 (3)

干 井 洋 一

I

前稿に引き続きシンボルの技法について考察を続ける。本稿を含む一連の論考においては、マンスフィールドの短編小説を具体例として取り上げつつ、作中におけるシンボルが果たす役割を分析していく。まずは前稿における議論を以下にまとめる。前稿では、「人形の家」(‘The Doll’s House’)において「ランプ」(‘lamp’)がもつ象徴的意味について簡単に紹介するとともに、ケルヴィー家の姉妹である、リルとエルスを同一視することに問題があることを指摘した。先行研究において、リルとエルスのケルヴィー姉妹はしばしば、バーネル家のキザイアと共に一纏まりの存在として扱われることが多いのだが、リルとエルスは別々の存在として捉えるべきであろう。作者マンスフィールドは、社会的弱者であるケルヴィー姉妹2人を同情的に描いているが、一方では、リルとエルスを異なる存在として明確に描き分けているのである。

本稿においては、「事物」がシンボルとして機能するケースを詳しく分析していく¹。先行研究が注目する「ランプ」(‘lamp’)だけでなく、「人形の家」(‘the doll’s house’)、4体の「人形」(‘dolls’)がもつ象徴的意味についても考察する。シンボルの技法を具体的に考えていく文学作品としてマンスフィールドの短編を選んだのは、彼女がシンボルを非常に効果的に用いているからである。幾つか例を挙げると、代表作といえる「園遊会」(‘The Garden Party’)では、シェリダン夫人の「庭」(‘garden’)が或る閉じられた特権的空間を象徴していると考えられる。また「蠅」(‘The Fly’)においては、表題となっている「蠅」が複数の象徴的意味をもつシンボルとして機能している。また「ミス・ブリル」(‘Miss Brill’)における「毛皮の襟巻き」(‘fur’)も多義性を備えた興味深いシンボルであり、読者によって襟巻きがもつ象徴的意味は異なるものとなるだろう。

それでは「人形の家」における重要なシンボルとしては、どのようなものが挙げられるだろうか(シンボルとして機能している「登場人物、場所、行動」²については次稿で扱う)。本作品の先行研究においては、「人形の家」のテーブル中央に置かれている「ランプ」が重要なシンボルとして議論されてきた。一方、本作品の題名でもある「人形の家」自体や、人形の家に置かれている「4体の人形」に関しては、十分な検討がなされていない。

II

「人形の家」におけるシンボルについて、前稿より詳細な分析を行なう。まずは、4体の人形のうち、大人の2体に注目してみよう。人形の家の中にある4体の人形と、主人公が最も気に入るランプは、次のように描写されている。

The father and mother dolls, who sprawled very stiff as though they had fainted in the drawing-room, and their two little children asleep upstairs, were really too big for the doll's house. They didn't look as though they belonged. But the lamp was perfect. It seemed to smile at Kezia, to say, "I live here." The lamp was real. (384, emphasis added) ³

最も注目に値するのは、大人2体の人形に関する説明がすべて否定的な意味合いをもつ語で占められていることである（子供の人形についても同様であるが、この点については後述する）。1語ずつ詳しく見ていこう。まず、*ODE (Oxford Dictionary of English)* は 'sprawl' を 'fall with one's arms and legs spread out in an ungainly way' (emphasis added) と説明している。このように、'sprawl' は相当否定的なニュアンスを持っており、父親と母親の人形2体は「見苦しく、無様に」横になっているのである。そして、'stiff' は「強張った」という意味だけでなく、「死後硬直」という意味も有している。同様に、'fainted' にも「卒倒」や「気絶」という否定的な意味がある。このようにネガティブな描写が続く、父と母の人形がもつ象徴的意味を肯定的に解することは難しいと言えるだろう⁴。

大人の人形がもつ象徴的意味を考えていくためには、前稿で検討した、「公的シンボル、または一般的シンボル」('public symbol') と、「私的シンボル、または作者独自のシンボル」('private symbol') という2つの区分を踏まえることが重要である。まずは、『ベドフォード批評文学辞典』(*The Bedford Glossary of Critical and Literary Terms*)に基づく、シンボルの定義に関する3つの項目を列挙する。

まず第1に、『ベドフォード批評文学辞典』に拠ると、シンボルによって表されるものは、シンボルそのもの「より大きく、より複雑なもの」である。他の辞典と比べると、「他の何ものか」('something else')であるとする『ウェブスター文学百科事典』(*Merriam-Webster's Encyclopedia of Literature*)の漠然とした定義より、ずっと的確な定義となっている。また、シンボルそのもの「より大きく、より複雑なもの」という定義は、「シンボルそれ自体を超えた何ものか」であるとする『20世紀英語文学辞典』の定義に近いと言えるだろう⁵。

第2に、『ベドフォード批評文学辞典』は、シンボルには、ある文化と言語のもとで共有されるシンボルと、特定の作品の中で生み出されるユニークなシンボルという2つのタイプがあると指摘している。この区分は、シンボルを 'public symbols' と 'private symbols' とに二分した『ウェブスター文学百科事典』の定義に近いが、『ベドフォード批

『評文学辞典』は2番目のタイプのシンボルをより詳細に説明している。「作家は作中で、複雑ではあるものの、見分けることが可能な、連想の網の目を張り巡らすことで、作者独自のシンボルを創造することがある」⁶と『ベドフォード批評文学辞典』は解説している。

第3に、他の2つの辞典が触れていない、非常に重要な説明が『ベドフォード批評文学辞典』には追加されている。「もの」だけがシンボルとなるのではなく、「人物、場所、行動」もシンボルとなりうるということが明記されているのである。一方、『20世紀英語文学辞典』においては、シンボルとは「ある事物」であると限定されており、同じく、『ウェブスター文学百科事典』においても、シンボルは‘something’であるとしか説明されていない。

III

本節においては大人2体の人形がもつ象徴的意味について考察を行なう。「一般的シンボル’(public symbol)’として、「人形’(dolls)’がもつ象徴的意味にはどのようなものがあるのかを確認してみよう。まず、「魂や祖先」、「魂の守護者としての神像」といった意味がある⁷。しかしながら、第II節で詳しく検討したように、本作品で描かれる、大人2体の人形は非常に否定的に描かれており、このような肯定的意味を担うシンボルとして機能しているとは言い難い。また、一般的シンボルとしての人形には「同一化」という象徴的意味もあり、本作品において、作者による批判の対象となっている大人は、大人2体の人形と「同一」の存在であるという意味が込められていると言えるであろう⁸。大人の人形は、階級社会の歪みに全く違和感を持たない、傲慢な大人を象徴的に具現化したものである。

本作品に接した読者は、作中における大人たちの言動に対する、作者の批判的な眼差しに気づく。作品で扱われている主要テーマは、学校生活におけるケルヴィー姉妹への虐めであり、しかも虐めを行なう主体は子供だけではなく、大人である教師も含まれている。そして、作者マンスフィールドは、学校内で虐めが起きる原因が元々は大人にあることを巧みに描き出している。階級差別に対して全く疑問を抱かない大多数の子供を作り出しているのは、差別を当然視している大人なのである。このように階級差別という観点から本作品を俯瞰すると、差別を当たり前のことと見なしている大人しか登場しないことに読者はすぐに気づき、それは作者の意図的な人物造形の結果であると理解するだろう。

実際、作者はケルヴィー姉妹への虐めを描く中で、本来なら虐めを咎める側に立つべき教師が、逆に虐める側に加担している場面を描いている。件の教師は、周りの子供たちがケルヴィー姉妹に口も聞かないという状況を全く問題視せず、周りの子供たちが姉妹を虐めることを黙認している。それどころか、この女性教師自身が虐めを行なう側にまわっており、教師がケルヴィー姉妹へ向ける場合と、他の生徒へと向ける場合では、「声の調子自体がいつもと違っている」(‘a special voice’)のである。さらには、最も低い社会階層に

属しているケルヴィー姉妹が、貧弱で見栄えのしない花しか教室に持ち込めないのを見て、この教師はそれを蔑み、姉妹の見えないところで「いつもと違う冷笑」(a special smile)を他の子供に向けて浮かべるのである。

また本作品に登場する大人は皆、階級差別を当然視しており、頑なな社会通念に盲従する存在でもある。この意味でも、大人は主体性を発揮することのなく、盲目的に社会の常識に従っているだけの「人形」といえる。「操り人形」(puppet)が「人形」(doll)の一種であることを考えると、大人2体の人形は「操り人形」でもある。そして、「一般的シンボル」として「操り人形」がもつ象徴的意味には「外部からの圧力にすぐ負けて、しつかりとした芯の強さがない人間」⁹ という意味があり、本作品に登場する大人を的確に表すものとなっている。

本節においては、「一般的シンボル」として、大人の人形がもつ象徴的意味を考えてきた。それでは、大人の人形は「作者独自のシンボル」としては機能していないのだろうか。この議論を深めていくためには、まずは子供2体の人形について考察する必要があり、第IV節で、子供2体の人形についての象徴的意味を検討した後に、「作者独自のシンボル」として大人2体の人形がもつ意味について再検討する。

IV

本節では、大人の人形と共に描写されている、2体の子供の人形について考えてみよう。第II節で取り上げた箇所を再度引用する。

The father and mother dolls, who sprawled very stiff as though they had fainted in the drawing-room, and their two little children asleep upstairs, were really too big for the doll's house. They didn't look as though they belonged. (384, emphasis added)

既に取り上げたように、最初の文の前半では、父親と母親の人形が極めて否定的に描かれており、同様に、後半の引用における子供2体の人形に対する描写も非常にネガティブなものである。詳しく見ていくと、一般的には中立もしくは肯定的なニュアンスをもつ 'big' という語は、'too' という語と組み合わせられることで「大きすぎる」という否定的な意味を帯びている。そして、子供の人形が「まるで人形の家に相応しくないように見えた」('didn't look as though they belonged') という、非常にネガティブな描写もある。

まず一般的シンボルの観点から、子供2体の人形がもつ象徴的意味を考えてみよう。「大きすぎる」子供の人形は、子供たちが尊大に振る舞っていることを表しており、子供たちが、虐めを生み出す原因である偏狭な社会通念に盲目的に従っている大人たちと、「同一」の言動をとっていることを示唆している。また子供たちは親の価値観を無批判に

受け入れており、彼らは偏狭な社会通念に振り回されている「操り人形」でもある。階級社会の歪みに対し何ら疑問を感じることなく、差別を当然視している大人たちを、「見苦しく、無様に」横になっている大人の人形が表しているように、子供の人形は、そのような親の価値観に染まってしまっている子供を指しているのである。

子供の人形が「まるで人形の家に相応しくないように見える」ことにも、象徴的意味が含まれていると言える。人形の家をもつ象徴的意味を中立的に捉え、この家は作品の舞台となっている地域社会そのものを表していると解するならば、人形の家に「相応しくない」、「大きすぎる」子供の人形は、階級差別を当然視し、尊大な言動を繰り返す子供たちを表していると言えるだろう（人形の家をもつ象徴的意味については次稿で検討する）。

ここまでは「一般的シンボル」の観点から、子供2体の人形がもつ象徴的意味を考えてきた。次に、子供の人形が「作者独自のシンボル」として機能しているかどうかを検討してみよう。第 II 節で述べたように、「作者独自のシンボル」とは、作家がその作品の中で「複雑ではあるものの、見分けることが可能な、連想の網の目を張り巡らすこと」によって、独特な象徴的意味を紡ぎ出すものである。本作品においては、子供2体の人形は「作者独自のシンボル」として機能しており、「大きすぎる」子供2体の人形は、パーネル家の三姉妹のうち、長女イザベルと三女ロティを指していると考えられる。

イザベラとロティの2人は、大人たちが日常的に行っている階級差別に対し、まったく違和感を抱いていない子供たちであり、とりわけイザベルはケルヴィー姉妹への虐めを当然視している。人形の家に置かれている「大きすぎる」子供2体の人形が指しているのは、正にこの2人なのであり、偏狭な大人の価値観をそのまま受け入れているイザベルとロティを表しているのである。

このように「大きすぎる」子供2体の人形は、パーネル家の三姉妹のうち、長女イザベルと三女ロティを指している。それでは二女のキザイアはどこにいるのであろうか。否定的評価が下されている子供2体の人形に対し、「ランプ」は「本物」であり「完璧」なものであった。この対比を考慮するならば、ランプがキザイアを指していると解することは十分可能であろう。というのも、キザイアは虐めには加担しておらず、2人とは全く異なる振る舞いをしているからである。彼女はケルヴィー姉妹をなぜ仲間外れにするのかを母親に問うており、さらには母親の言いつけに背く形で、ケルヴィー姉妹を自宅の庭に招き、人形の家を2人に見せている。母親の命に従わないキザイアの行動について、作者は全く論評を加えず、読者にその解釈を委ねているが、作者がキザイアの言動を肯定的に描いていることは十分読者に伝わるようになっていと言えるだろう（ランプが作者独自のシンボルであり、キザイアを表していることについては第 VIII 節で再度取り上げる）。

次に、第 III 節で一旦留保していた問題を考えてみよう。上述したように、「作者独自のシンボル」として、子供2体の人形とランプがパーネル三姉妹を指していると解釈するならば、大人2体の人形はパーネル家の父親と母親を指していると言えるだろう。大人2体の人形は「一般的シンボル」として、偏狭な大人たちを表しているだけではなく、「作

者独自のシンボル」として、バーネル家の両親を表していると解することができるのである。次節では、大人2体の人形の一つである、バーネル家の母親の言動を具体的に考えてみよう。

V

バーネル家三姉妹の母親が、偏狭な階級社会に対し何ら疑問を抱いていないことは次の箇所から明らかである。

Even the dinner hour was given up to talking about it [=the doll's house]. The little girls sat under the pines eating their thick mutton sandwiches and big slabs of johnny cake spread with butter. While always, as near as they could get, sat the Kelveys, our Else holding on to Lil, listening too, while they chewed their jam sandwiches out of a newspaper soaked with large red blobs.

“Mother,” said Kezia, “can't I ask the Kelveys just once?”

“Certainly not, Kezia.”

“But why not?”

“Run away, Kezia; you know quite well why not.” (387-8, emphasis added)

上の引用から、ケルヴィー姉妹は他の生徒から仲間外れにされているものの、彼女らも人形の家に関心を持っており、他の生徒の「出来るだけ近くに」座りながら、聞き耳を立てていることがわかる。そして、人形の家のことだけに限らず、2人が様々な面で他の生徒と接点を持ちたいと考えていることにも読者は気づくだろう。

そして上述の引用の5行目と6行目との間には、物語の展開上、はっきりとした切れ目があり、場面が突然切り換わっている。引用冒頭の、学校における昼食の場面は、唐突に、帰宅後にキザイアが母親に、ケルヴィー姉妹に人形の家を見せてあげることができないかどうかを尋ねる場面に切り換わっているのである。この場面転換について、特段の説明が加えられることはなく、また空白行や接続詞が差し挟まれることもない。

上述の引用の後半部は、人形の家を見せる許可をキザイアが母親から得ようとするやりとりなのであるが、より深い意味では、ケルヴィー姉妹を仲間外れにするのは何故なのかを母親に尋ねている場面でもある。この非常に重要な場面においても、作者は論評を加えることなく、ただ単に、キザイアと母親の会話を読者に「提示」(‘showing’)するに留めている。しかし読者は、上述の場面から、人形の家をケルヴィー姉妹に見せてあげたいと考えるキザイアの優しさを読み取ることになるだろう。一方、母親に対する読者の反応は冷たいものとなる。「あっちへお行きなさい、理由はよくわかっているでしょう」と言って、具体的な理由をまったく告げることなく、娘の願いを一蹴する母親を読者は否定的に捉え

ることになる。

このようにバーネル夫人も、上述した学校の教師と同じく、階級差別を当然視している社会の現状にまったく疑問を抱いていない大人なのである。さらには、学校で当たり前のようになっている差別や虐めに対し、強い違和感をもっている次女キザイアの成長を阻害する大人の一人でもある。このように、ジェントルマン階級の家庭における、一見何気ない、娘と母親のやりとりは、子供たちが階級差別を当たり前のこととして受け入れていくプロセスを的確に抉り出している場面と言えるだろう。階級差別を当然視する大人たちが、自分たちと同様の、偏狭な価値観をもつ子供たちを再生産していく場面を読者に「提示」することにより、作者マンスフィールドは、社会から階級差別が一向に無くならない原因が大人たちにあることを明らかにしているのである。

バーネル家の長女イザベルと三女のロティが、母親の偏狭な価値観をそのまま受け継いでいることからすると、本作品において姿を見せないバーネル氏もまた、夫人と同様に階級差別を当然視している人物であると言えるだろう。このように、父親と母親の人形2体は、それぞれの家庭において階級差別を再生産している大人一般を指すだけでなく（一般的シンボル）、本作品において最も社会的地位が高いバーネル夫妻を指している（独自のシンボル）と解することも可能であろう。

階級という面から見ると、この地域の頂点に立っているのがバーネル家であり、それは彼らが地域社会の在り方に最も影響力を行使しうる存在であることを意味している。もし夫妻が、階級差別に苦しんでいるケルヴィー姉妹の現状に少しでも疑問を抱いていたならば、姉妹に対する扱いは劇的に改善していたであろう。しかし、上述の引用が明らかにしているように、主人公の母親であるバーネル夫人がそのような行動を取ることはありえない。また作品にバーネル氏がまったく登場しないことも、夫妻が階級差別やそれに由来する虐めの問題に全く関心がないことを暗に表していると言えるだろう。

VI

大人と子供それぞれ2体の人形について描写されたあと、本作品で最も重要なシンボルであるランプについての記述が続く。

They [their two little children] didn't look as though they belonged. But the lamp was perfect. It seemed to smile at Kezia, to say, "I live here." The lamp was real.
(384, emphasis added)

人形を評するネガティブな表現とはまったく対照的に、ランプを評する語は非常に肯定的なものである。引用文が強調するように、ランプは「完璧」(‘perfect’)であり、「本物」(‘real’)なのである。

第 I 節で述べたように、本作品についての先行研究はランプがもつ象徴的意味に強い関心を寄せている。マンスフィールドの諸作品に対するシンボル分析は初期の研究において最も注目を集めた研究であり、パーキン、ハンソン&ガー、ハンキン、フルブルックらによって行われてきた¹⁰。そして、本短編「人形の家」に対するシンボル分析については、現在でもハンキンと、ハンソン&ガーによる2つの先行研究が大きな影響力をもっていると言えるだろう。ハンキンは、人形の家テーブル中央に置かれたランプについて次のように述べている。

Overlaying the work's psychological meaning is the obvious moral indignation at class discrimination. But even more important in terms of the story's overall effect is the symbol of the 'little lamp.' Its beauties appreciated only by Kezia and Kelveys, the lamp is at once a symbol of the three children's separateness — and their innate superiority.¹¹ (emphasis added)

ハンキンは、作中に描かれた「小さなランプ」がもつ象徴的意味の重要性を指摘し、ランプは「3人の子供たちの特異性」、そして「彼女らが備えている、生得の優位性」の象徴であると述べている。

2つ目の例として、ハンソンとガーによるランプの解釈を取り上げる。2人は「人形の家」を論評した最後の部分で、ランプがもつ象徴的意味について次のような説明を加えている。

In this, the last major story in the Burnell and the Sheridan groupings of stories, Katherine Mansfield returns to her longest-lasting concern, art, and to her most rewarding technique, symbolism. The little lamp is not only light but art, the central reality amidst the material splendours of the doll's house. It shines out the Kezia and reaches across the gulf between the young Burnell princess and owlish little Else.¹² (emphasis added)

ハンソンらの言う「the last major story」とは短編「人形の家」を指しており、この作品において、ランプが重要な役割を果たしていることを2人は説明している。そしてハンソンとガーは、ランプだけでなく、人形の家や、大人の人形2体についても、象徴的意味を認めていると言えるだろう。引用にあるように、人形の家は「物質的な豪華さ」を表すものであり、そして引用の後の箇所述べているように、作中に登場する大人は精神的なもの

に重要性を見出さない、「富と財のみを重視する価値観」(‘materialist values’)に囚われた者なのである¹³。

ハンソンとガーは、ランプが象徴するものは、単なる「光」ではなく「芸術」であり、ランプは「人形の家がもつ物質的な豪華さ」の中において、「中心に位置する確たる現実」であると考ええる。そして、ランプは階級を超え、キザイアとエルスを結びつけるものでもあると2人は解釈している。

VII

人形の家、4体の人形という2種のシンボルに関する研究と比較するならば、ランプがもつ象徴的意味に関しては、啓発的で興味深い先行研究がある。しかしながら、前節で取り上げた2つの先行研究はランプがもつ象徴的意味を狭く捉えすぎているのではないだろうか。まず、ランプを「生得の優位性」として捉えるハンキンの解釈について考えてみよう。

ハンキンの解釈がもつ問題点は、ケルヴィー家のリルとエルスを同一視することにある。前稿で詳しく説明したように、母親の言いつけをきちんと守り、階級差別を疑問視することなく受け入れている姉のリルは、大人の価値観をそのまま受け継いでいる子どもに分類される。作中において最も社会的地位が高いバーネル家の三姉妹のうち、リルと同様に、大人の価値観を無条件に受け入れているのは長女のイザベルと三女のロティである。つまり社会階層の高低という観点から見ると、リルとエルスはどちらも低い側にいるが、大人の価値観をそのまま受け入れるか否かという観点から見ると、リルはイザベルとロティに近いのである。また、作品を注意深く見ていくと、ランプに注目したのはエルスだけであり、リルがランプに魅せられたという記述はない。以上のことから、「ランプの美しさを真に理解したのはキザイアとケルヴィー姉妹だけであった」(‘its beauties appreciated only by Kezia and Kelveys’)というハンキンの説明には無理があると言えるだろう。

また、本作品「人形の家」において、エルスが何歳なのかは明示されていない。彼女は相当幼いことが予想され、しゃべることも微笑むことも皆無に近いエルスは、姉のリルといつも一緒にいる。周りから冷たい態度を取られながらも、黙って相手をじっと見据えるエルスは強い自我を持っていると考えられるものの、ハンキンの主張するように、幼いエルスが「生得の優位性」を備えていると断言できるかどうかは少々疑問である。

ランプは「芸術」を表しているというハンソンとガーの解釈も、作者マンスフィールドの分身であるキザイアには当てはまるかもしれないが、幼いエルスにも同様のことが言えるかどうかについては疑問が残る。このように、前節で取り上げた2つの先行研究はランプがもつ象徴的意味を狭く捉えすぎているのではないだろうか。上述したハンキンらの先行研究は、象徴主義や唯美主義に強い影響を受けたマンスフィールドの生涯と関連付ける形で、「人形の家」におけるランプがもつ象徴的意味について考察しているが、次節ではマンスフィールド作品における解釈の多様性という観点から、ランプがもつ象徴的意味を検討してみよう。

VIII

第1に、一般的シンボルという観点からランプについて考えてみよう。一般的シンボルとして、ランプがもつ象徴的意味としては「光」、「希望」、「自己犠牲」（芯を燃やすことで輝き、最後には消えることに由来）を挙げることができる¹⁴。人形の家にある調度品の中で、一番ランプに魅せられたキザイアは、姉イザベルや妹ロティとは全く異なるタイプの子供であり、それはキザイアが、仲間外れにされていたケルヴィー姉妹に、人形の家を見るために、自宅の庭に入るように強く勧めるところからも明らかである。第V節で取り上げたように、キザイアは母親に対し、どうしてケルヴィー姉妹に人形の家を見せてはいけないのかを尋ねている。そして、姉妹に人形の家を見せることを母親から禁じられたにもかかわらず、キザイアはケルヴィー姉妹を自宅の庭に招き入れ、2人に人形の家を見せるという決断をする。読者はキザイアの行動に共感するとともに、主人公のような行動をとる子供が増えるならば、ケルヴィー姉妹が置かれた辛い境遇は少しずつではあれ改善していくのではないかという希望をもつであろう。このようにキザイアは、ケルヴィー姉妹を始めとする差別を受けている子供たちにとって「希望」の「光」なのである。

また一般的シンボルとして、ランプがもつ象徴的意味である「自己犠牲」についても、本作品のランプは大いに関係があると言えるだろう。上述のように、キザイアは母親から禁止されたにもかかわらず、人形の家を見せてもらっていない最後の2人である、ケルヴィー姉妹を自宅の庭に招き入れ、人形の家を見る機会を与えている。そのことをベリル叔母に見つかった3人はひどく叱られており、結果から見れば、キザイアが「自己犠牲」を払ったために、ケルヴィー姉妹は人形の家を見ることが可能になったと言えるだろう。

第2に、作者独自のシンボルとしてのランプを考えてみよう。まず、前述した2つの先行研究によるランプの解釈は、ランプを作者独自のシンボルとして扱っていると言える。ハンキンの解釈である「生得の優位性」は、キザイアとエルスが他の子供達より優れた存在であることを示している。そして、ランプは「芸術」を表すというハンソンとガーの解釈は、天性の芸術家としての才能を備えているため、キザイアとエルスが階級差別を当然視する大人の価値観に容易に染まらないことを表していることになるだろう。

ランプがもつ象徴的意味に関して、これまで主張されてきた代表的な解釈は、マンスフィールドが象徴主義や芸術至上主義に傾倒したという作者の伝記的事実（‘biographical facts’）に強く影響を受けた結果であり、芸術的素養の有無という方向に傾きすぎているのではないだろうか。もちろん、先行研究のような解釈も可能なのであるが、伝記的事実を離れ、作品それ自体に即した形でシンボル分析を行なうならば、ランプに対する解釈としては、以下のようなものが妥当であろう。

1 つ目は、ランプは中身のない世俗的な豪華さや偏狭な社会通念に惑わされてしまう者と、惑わされない者を見分ける役割を果たしているという解釈である。ランプの良さが分かる者は、大人が当然視する価値観に安易に染まることなく、確固とした自我をもつ者なのだ。ほとんどすべての子ども（差別される側であるケルヴィー家の姉リルを含む）が、大人がもつ価値観をそのまま受け継ぎ、階級差別を再生産させていく中で、共に次女であるキザイアとエルスは違う道を歩む。2人は大人の言動をそのまま模倣することはなく、独自の生き方を選んでいくのだ。

2 つ目は、ランプが指し示しているのは主人公キザイア自身であるという解釈である。この解釈は、第 IV 節で提起した「子供2体の人形がイザベルとロティならば、キザイアはどこにいるのであろうか」という問いに対する答えにもなっている。ランプは「希望」の「光」を表すだけでなく、それを体現するキザイア自身を表しているのである。

次稿においては、3番目のシンボルである「人形の家」が表す象徴的意味を考えるとともに、本作品の中で描写される「事物」¹⁵だけでなく、「登場人物、場所、行動」¹⁶もシンボルとして機能し得ることを分析していく。

注

¹ 『20世紀英語文学辞典』（研究社、2005）「シンボル」の項。

² Ross Murfin and Ray Supryia, *The Bedford Glossary of Critical and Literary Terms* (Bedford, 2003) 370.

-
- ³ 原文引用は Katherine Mansfield, *Collected Short Stories of Katherine Mansfield* (Penguin Modern Classics, 1981) に拠り、丸括弧内にページを記す。以下同様。
- ⁴ この段落における各語の日本語訳は『ランダムハウス英和大辞典』(第2版, 小学館, 1993) に拠る。
- ⁵ シンボルの定義に関する3項目については拙稿を参照。「文学の技法(2)」『英米文学英語学論集』(英米文学英語学会, 2017) 第6号。
- ⁶ 拙稿「文学の技法(2)」を参照。
- ⁷ 『イメージシンボル辞典』(大修館書店, 1984) 「doll 人形」の項。
- ⁸ 『世界シンボル大事典』(大修館書店, 1996) 「人形」の項。
- ⁹ 同書「操り人形」の項
- ¹⁰ Sylvia Berkman, *Katherine Mansfield: A Critical Study* (Yale University Press, 1951); Clare Hanson and Andrew Gurr, *Katherine Mansfield* (Palgrave, 1981); C.A. Hankin, *Katherine Mansfield and Her Confessional Stories* (Macmillan, 1983); Kate Fullbrook, *Katherine Mansfield* (Indiana University Press, 1986).
- ¹¹ *Katherine Mansfield and Her Confessional Stories*, 221. 下線部筆者。
- ¹² *Katherine Mansfield*, 128. 下線部筆者。
- ¹³ *Ibid.*, 128.
- ¹⁴ 『イメージシンボル辞典』「lamp ランプ」の項。
- ¹⁵ 『20世紀英語文学辞典』は「ある事物が、別のものを、特にそれ自体を超えた何ものかを類比によって表わすとき、これをシンボルという」と定義している。『20世紀英語文学辞典』(研究社, 2005)「シンボル」の項。
- ¹⁶ *The Bedford Glossary of Critical and Literary Terms* (Bedford, 2003) 370.